



《発掘調査の概要》

建物群南隣接地の調査（纏向遺跡第 168 次調査）

1. はじめに

桜井市教育委員会では桜井市大字辻 63-1 番地において纏向遺跡の第 168 次調査を実施しました。この調査は平成 20 年度から行われている範囲確認調査の 3 回目の調査となりますが、今回も土地所有者や地元関係者の方々から多大なるご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

さて、今回の調査地は昨年度に発掘調査を実施し、4 間四方（東西 12.4 m×南北 19.2 m）の規模に復元される建物 D や、近接棟持柱を持つ 3 間×2 間（東西 5.3 m、南北約 8 m）の建物 C などが確認された纏向遺跡第 166 次調査地（辻 63-1 番地）の南隣接地にあたります。

この調査は第 166 次調査で検出された建物群南側の遺構の様子を解明するために実施したもので、一部第 166 次調査地と重複する形でトレンチを設定し、平成 22 年 7 月 1 日から 10 月 18 日にかけて猛暑の中行われました。なお、調査面積は約 470㎡です。



写真 1 第 168 次調査地全景（西より）
黄色い柱が建物 D 南辺の柱穴跡で白い柱は柵とみられる柱穴跡を示しています。



2. 検出された遺構と遺物

今回の調査では第 20・162 次調査の調査成果を受けて上層では 3 世紀後半の遺構面となる包含層Ⅲ上面と、下層では包含層Ⅲの下部において確認された 3 世紀前半の遺構面となる地山及び整地層上面の 2 面において調査を行う予定でしたが、第 166 次調査地と同様に第 168 次調査区内では包含層Ⅲが調査区西側の一部にしか存在しなかったため上層遺構面の調査を断念し、下層遺構面にあたる地山及び整地層上面での調査を実施することとなりました。

なお、現時点では過去の調査地と同様に整地層の下にも下層遺構に先行する遺構が存在することが判明していますが、ここでは下層遺構面の状況についてのみご紹介してゆくこととします。

(1) 柱穴列

第 162 次調査において検出された建物群の南を画する東西方向の柱列の延長線上で柱穴群を検出しています。調査区の西半ではこの線上で 6 基の柱穴を検出し、東半では 5 基の柱穴の存在を確認していますが、東西長約 28 m の調査区のうち中央部分の約 13 m 分が SX-1001・SD-1011 によって大きく削平を受けているため、この間の状況を確認することができませんでした。しかしながら、これらの柱穴で構成される東西ラインは既に確認されている建物群と同様の方位を持つことや、第 162 次調査区内からでは約 34 m もの距離にわたって柱のラインが直線的につながる事などから、これらの中に柱列を構成するものが含まれていると考えています。

なお、これまでに得られた知見からは柱列の構築時期は 3 世紀前半の庄内式期古相段階、そしてその廃絶は庄内 3 式期（3 世紀中頃）を含めてそれ以前と考えています。

(2) 大型土坑 (SK-3001)

a. 遺構の概要

調査区の中央より東側から検出された長楕円形の土坑です。残存する規模は南北約 4.3 m、東西約 2.2 m を測りますが、遺構上部の大半が後世の溝遺構である SD-1011（4 世紀初め・布留 1 式期）に削平を受けており、本来は若干規模の大きいものだったと考えられます。溝の削平を受けていない所では湧水点にまで達する深さ約 80cm 分が検出されていますが、大きく削平を受けた土坑西側では 35 cm 分しか残っていませんでした。

この土坑からの出土遺物には線刻を施した短頸直口壺や底部穿孔を施した小型の直口壺、手捏ね土器・ミニチュアの S 字甕などのミニチュア土器が数多く出土しているほか、へら状木製品 4 点、黒漆塗りの弓 1 点、木製槽 1 点、木製容器 1 点、木製筒形容器 2 点、木製横槌 2 点、剣形木製品 1 点、垂木と見られる有頭棒 1 点、竹製籠 6 点、ガラス粟玉が出土しています。

なお、多量に出土した桃核の中には未成熟のものも一定量含まれており、成熟・未成熟を問わず桃を大量に集める必要があったものと考えられます。また、桃の一部には果肉が残っているものも少量含まれていました。これらの出土遺物は何らかの祭祀行為に伴うものと考えられますが、特徴的なのは横槌とへら状木製品、底部穿孔を施した小型の直口壺を除く総ての遺物が壊された状態かつ、それぞれが一部分しか出土しておらず、近隣で何らかの祭祀を行った後に道具類を破壊し、土坑まで運ばれて投棄されたか、或いは意図的に一部分のみを投棄したものと考えられます。遺物の年代観から土坑の年代は庄内 3 式期（3 世紀中頃）のものと考えられ、その内容や土坑の北端が柱列のラインと重なる事などから土坑は建物群の廃絶後に掘削されたと推定されます。

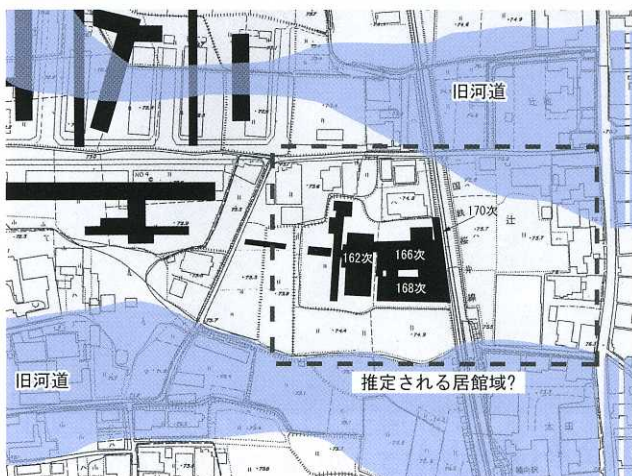


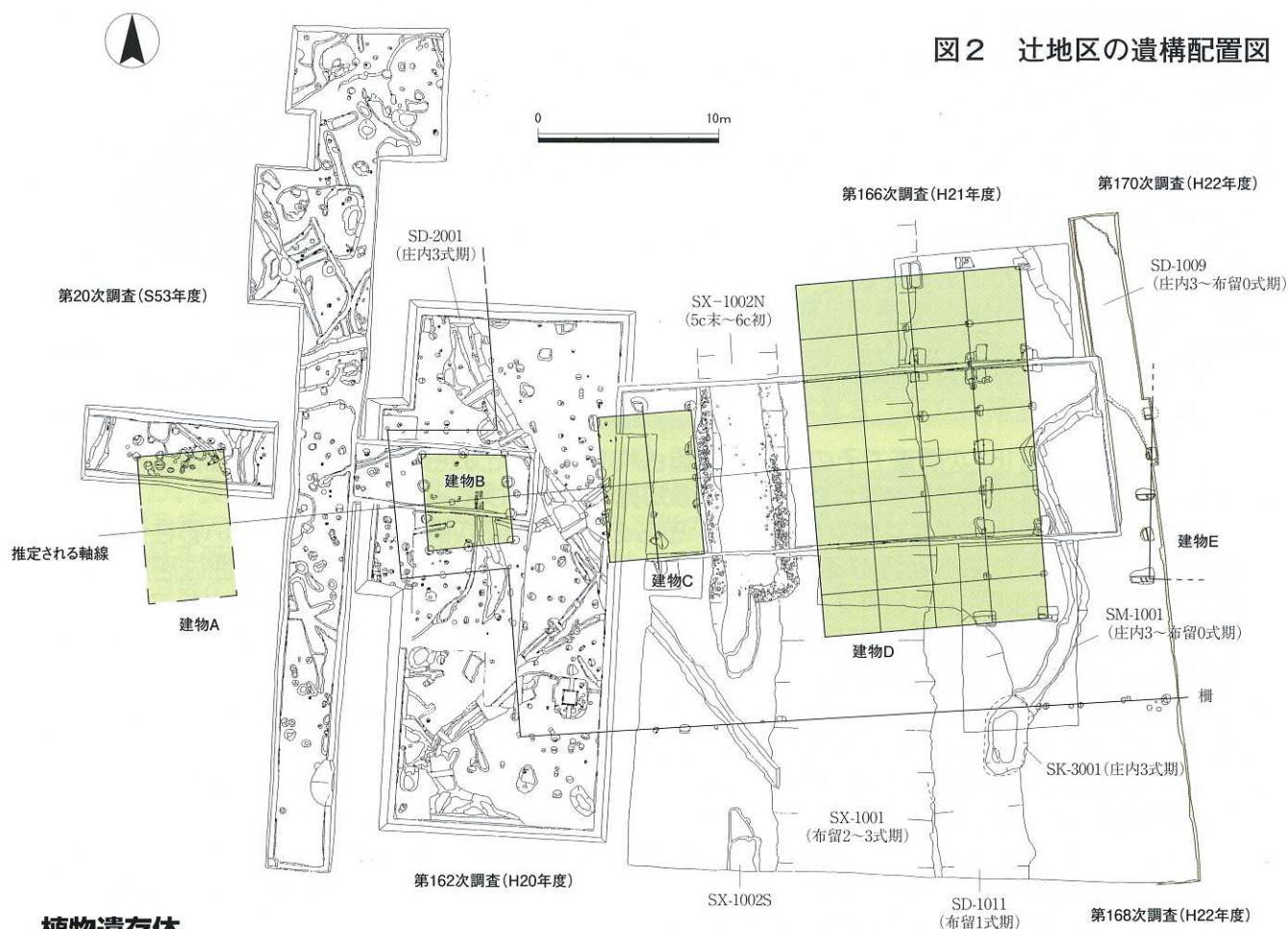
図 1 第 168・170 次調査位置図

b. 分析結果について 動物遺存体

土坑から出土した動物遺存体には魚類・両生類・鳥類・哺乳類があります。魚類で種別の判明しているものはイワシ類・タイ科（マダイ・ヘダイ）・アジ科・サバ科・コイ科の骨や歯がありますが、他にもいまだ調査の進んでいない骨や鱗などが数多く残されており、今後の検討で魚種はさらに増加する可能性もあります。

また、両生類ではカエル類、鳥類ではカモ科、哺乳類では齧歯（げっし）類・ニホンジカ・イノシシ属の骨や歯などが確認されています。このうちカエル類・齧歯類は出土状況などから供献されたものではなく、混入によるものと考えています。

図2 辻地区の遺構配置図



植物遺存体

植物遺存体には種実と花粉があります。種実は総数にして9,760点もの出土がありました。この中で栽培種とみられるものにはイネ938点・アワ74点・ヒエ2点・モモ2,769点・スモモ52点・アサ535点・エゴマ24点・ウリ類2,076点・ヒョウタン類213点・ササゲ属3点などがありました。

野生種の中にもカヤ1点・ヤマモモ36点・キイチゴ属2点・サンショウ80点・トチノキ216点・ブドウ属22点・マタタビ18点・サルナシ15点・サクラ属サクラ節3点・ヒメコウゾ480点・ヤマグワ23点・グミ属4点・ニフトコ7点・ガマズミ属1点・シソ属2点などの食用となる植物がいましたが、食品として集められたものか否かは判然としません。

また、花粉の分析からも多様な植物の存在が確認されていますが、特筆すべきものにはサクラ属(モモ・スモモ型)があり、居館域の近隣にモモ・スモモの林が広がっていた事が推定され、土坑から出土した桃はこの林において栽培されていた可能性が指摘されています。

これらの分析結果からはともに出土した土器・木製品以外の土坑に投棄された供献遺物の具体的な組成が明らかとなり、大型土坑周辺において行われた祭祀の状況がより鮮明になってきました。中でも豊富な栽培植物の内容や内陸の纏向遺跡において同一の土坑から多様な海水魚が確認されたことは注目すべきもので、鳥や獣などもあわせてバリエーションに富んだ供物がならべられていた様子が見えてきます。



写真2 大型土坑遺物出土状況 (東より)



写真3 竹製籠出土状況 (北より)



(3) その他の遺物

遺構に伴うものではありませんが、特筆すべき遺物として古墳時代後期の包含層から銅鐸の鱗の破片が1点出土しています。破片は長さ3.7cm、幅3.2cm、重量13.14gの小さなものですが、鱗の大きさから推定すると、本来は比較的大型の突線鈕式銅鐸の破片と考えられるものです。

調査区周辺では西約100mの地点において昭和47年に実施された第7次調査地からもほぼ同様の大きさで見られる突線鈕式銅鐸の飾耳の破片が出土しており、今回の銅鐸片との関係が注目されるものです。



写真4 銅鐸の破片

3. まとめ

今回の調査では第162次調査でその一部が確認されていた柵とみられる柱列の延長部分とその周辺の遺構の様子を知ることができました。これらの知見を順に挙げてみると、

1. 後世の遺構によって大きく削平を受けているものの、第162次調査で検出されている柱列の延長線上においてさらに東へと伸びる柱列を検出しています。この柱列で囲まれた範囲は居館域の内郭にあたるものではないかと考えられていましたが、今回の調査ではこれまで確認されている建物C・Dの南側へと伸びてゆく様子が確認できました。遺構の状況から推定すると柱列はさら東方へと伸びていくものと予想されます。
2. 今回の調査区内においては先述した柱列以外には建物群に関する施設は確認することができませんでした。なお、建物Dの南面から柱列までの距離は約5mです。
3. 大型土坑は出土遺物の年代観やその内容、土坑の北端が柱列のラインと重なる事などからは土坑が建物群の廃絶後に掘削され、「マツリ」が行われたものである事が推定されます。

現時点では建物の廃絶と土坑の掘削にどの程度の時間差があったのか、またどのような意味と内容を持って祭祀が行われたのかは判然としませんが、建物群との関係を積極的に考えるのであれば、今回確認された土坑は建物群の解体時に執り行われたマツリの痕跡なのかも知れません。

4. 大型土坑埋土の土壌分析は纏向遺跡ではかつて行われた事の無い埋土の悉皆調査となりました。ここから得られた様々なデータは纏向遺跡の中核域、ひいては王権中核部において行われたマツリ的一端を窺わせるもので、極めて重要な成果と言えるでしょう。

今後も関係各位のご協力のもと、周辺地区の調査を推進し、居館域の構造や個々の遺構の性格を明らかにしていきたいと考えています。

(橋本輝彦)



写真5 大型土坑の完掘状況(北より)



写真6 カモ科(鳥)の胸骨出土状況



写真7 出土した桃核

新たな建物遺構を確認 (纏向遺跡第 170 次調査)

纏向遺跡第 170 次調査は第 166・168 次調査地の東隣接地大字辻 63-1 番地において調査を実施しました。

今回の調査地は第 168 次調査時に調査区を東側に拡張した際、新たな建物遺構になると考えられた柱穴を確認したため、平成 23 年 2 月 28 日から 3 月 29 日までの間実施したものです。トレンチは東に隣接する JR 万葉まほろば線の線路に沿う形で幅 2.5 m、長さ 30 m と南北に細長いトレンチを設定し、75㎡の調査をおこないました。

この調査の結果、全体像は不明ながら建物 D の東側に N-1 ~ 2° - E の方位を持った南北 9 m 以上の規模を持つ大型建物の存在が明らかになりました。

この建物(ここでは建物 E と仮称します。)は大型の柱穴 5 基が検出されており、長方形と方形の 2 つのタイプがありますが、長方形の柱穴は東西が約 1.2 m、南北が約 70 cm の規模を持つもので、最も南端で検出された長方形の柱穴内には柱を受ける大きな根石が据えられていました。

一方、方形の柱穴は一辺が約 70 cm の規模を持ちますが、長方形のものに比べると少し小さめの柱穴です。

いずれの柱穴も柱材が抜き取られており、柱材は残っていませんでしたが、南から順番に長方形→方形→長方形→方形と交互に規則正しく掘削されており、恐らくは先に確認されている建物 D と同様の構造で、長方形柱穴は主柱を建てるためのもの、方形は床を支える束柱のための柱穴と考えられます。このことは主柱穴間の距離が約 4.5 m と非常に広い事、そして方形柱穴がその中間に正しく配置されていることからもうかがえるものです。

残念ながら、建物全体を調査する事ができなかったため、建物 E の構築・廃絶の時期は確認できませんでしたが、他の遺構との切り合い関係からその構築は布留 0 式期(3 世紀後半)を含めてそれ以降ということしか解っていません。

今回新たに確認された建物 E は少なくともこれまでに確認されている 4 棟の建物群とは建てられた時期や方位が異なる事から、3 世紀の居館と同じ場所に未知の居館が建てられていた可能性ができました。

今のところ、他に建物 E に伴う施設は全く確認されていませんが、今後の調査でその全貌が明らかになることが期待されます。(橋本輝彦)



写真 8 新たに確認された大型建物 (西北より)



写真 9 主柱柱穴の状況(南より)



写真 10 束柱柱穴の状況(西より)

《マキムクの緑!!》

写真は纏向遺跡第 170 次調査で検出された大型建物の束柱南端柱穴の下層から出土した木の葉の塊で、柱穴埋土の下層下面中央に敷き詰めるように入れられていました。この柱穴の下には先行する弥生時代後期の溝跡があり、脆弱な地盤に掘られた柱穴であることから、柱材の沈下を防ぐために敷き詰められたものではないかと考えています。茶色く変色した葉の中に緑色の部分が見えるでしょうか?これは柱穴に入れられた葉の色が埋没環境のおかげで色褪せることなく現代まで残っていたもので、めったにみる事ができないものです。これを発見されたのは今回も助っ人として参加されていた有名な?映画俳優の苅谷俊介さん。調査担当者のひとり H も 24 年間の調査経験の中でも 2 回目の遭遇で、感激のあまり T 君に指示して写真を撮りました。残念ながらこのあと数時間で葉は茶色く変色してしまい、もう当時の緑はみる事ができません。



柱穴出土の木の葉

纏向遺跡第168次調査の現地説明会が開催されました！

纏向遺跡第168次調査の現地説明会が平成22年9月19日に快晴のもと開催されました。今回の調査では前年度に確認された建物群の南側から検出された祭祀土坑と、そこから出土した多量の桃の種(桃核)に注目が集まり、マスコミで大々的に報道されたことも手伝って約2000人と多くの方がお越しになりました。

当日は今回出土した果肉の残った桃や、品種改良されていない現代の桃の実物なども展示しましたが、品種改良された現在の大形の桃との違いに皆さん驚かれるとともに、居館において桃が奉げられたいにしへのマツリに思いを馳せておられました。



出土遺物の展示風景

居館域西隣接地の調査 (纏向遺跡第169次調査)

平成22年11月24日から12月9日にかけて、大字太田で第169次調査を行いました。調査地周辺では、東側で居館と目される大型建物群が発見され、西側で「祭祀土坑」(辻地区)と呼ばれる土坑群が多く見つかっています。纏向遺跡のなかでも、遺構の密度が高い地域ということもあり成果が期待されました。

調査をおこなったところ、3世紀中頃の土坑を3基確認しました。このうち、土坑2は深さ約80cmと湧水層まで掘削され、中からは甕・壺・高坏などの土器が出土しました。祭祀を想像させるような出土遺物は見られなかったため、井戸のような機能をもっていたと考えられます。ひとくちに土坑といっても様々な用途があったのでしょう。

今回は、建物になるような柱穴跡などは見つかりませんでした。調査地付近は東側の地盤よりも一段低いため、東側の建物群とは異なった性格の土地利用がされたものと思われる。

当時の居館域周辺の状況を復元するのに良好な資料となるでしょう。(丹羽恵二)



写真11 第169次調査地全景(南東から)

何も無いのも成果です (纏向遺跡第171次調査)

纏向遺跡第171次調査は大字巻野内地内、珠城山古墳群と渋谷向山古墳に挟まれた場所、平成6年に実施した第80次調査地の東隣で平成23年5月31日から6月9日にかけて行われました。この第80次調査では、布留式期の区画溝とそれに伴う土塁・柱列が確認され、他にも鍛冶関連遺物が見つかっています。このような特殊な遺構・遺物が出土することから、このあたりは布留式期の中心地域ではないかと考えられています。

このような周辺の状況から今回は『区画溝の延長が見つかるのでは?』などと期待が膨らむ調査でした。しかし、実際に蓋を開けてみれば空き缶やビニール片が出土?し、見つかった遺構はピットが2基だけでした。地表から70cmまではほとんど攪乱されていたものの、区画溝はそれ以下にあると考えられたため、一部を深く掘り下げましたが、砂が堆積しているだけでそれらしい痕跡は見つかりませんでした。

このことから区画溝は別の場所に延びていることが考えられます。結果的に遺構や遺物が全く見つからない調査でしたが、このように何も無いことが解ることもまた成果なのです。(武田雄志)



写真12 第171次調査地全景(西から)



復元された大型建物復元模型

《建物群の模型が完成しました》

平成 22 年度の緊急雇用創出事業として纏向遺跡から発見された大型建物を含む建物群の復元模型を製作しました。この模型は専門業者である増田文物工作隊に委託して作成したもので、神戸大学の黒田龍二先生にご指導をいただきながらできるだけ実際の建築に近い手法で制作されたものです。

写真に写っているのは建物部分だけですが、実際は居館域周辺の環境も見えていただくべく、これまでの調査成果をもとに 1/50 スケールで 3 世紀の周辺地形の復元もおこなった非常に大きな模型です。この模型は普段埋蔵文化財センターで展示されていますので是非一度足をお運びください。

《寺沢先生が着任されました》

平成 23 年 3 月に奈良県立橿原考古学研究所を退職されました寺沢薫先生が纏向学研究センター設立準備顧問として桜井市に着任されました。

既にご存じの方も多いと思いますが、先生は早くから纏向遺跡の調査を御担当されるだけでなく、纏向遺跡にかかわる多くの研究論文、著作を執筆され、現在の「ヤマト王権の都宮」としての纏向遺跡の位置を確立された先生のお一人です。

桜井市では纏向遺跡の調査・研究を基礎とし、『纏向学』の提唱と実践・発信を目的とした仮称『纏向学研究センター』の設立を目指していますが、先生には既にその目的の達成のための様々な御指導や実務をこなして頂いています。

本冊子の創刊号からページプレートを持って登場する謎のオジサン、実は岩崎大介さん作による纏向研究一筋の研究者、マキムク先生という寺沢先生をモデルにしたキャラクターなのです。



《纏向遺跡を掘る調査員たち その2》

桜井市の調査員の紹介コーナーです。今回登場しますのは桜井市教育委員会の嘱託職員として調査や報告書の作成を支えてくれている 2 人の女性調査員、木場・苅谷の両君です。苅谷さんは昨年の 1 月に着任し、市内遺跡の調査に精力的に取り組んでくれましたが、9 月いっぱい桜井を離れ、神奈川県内で新たに文化財行政に携わる予定です。新天地での活躍を期待しています。



木場佳子 (こば よしこ) 京都府長岡京市出身、A 型です。

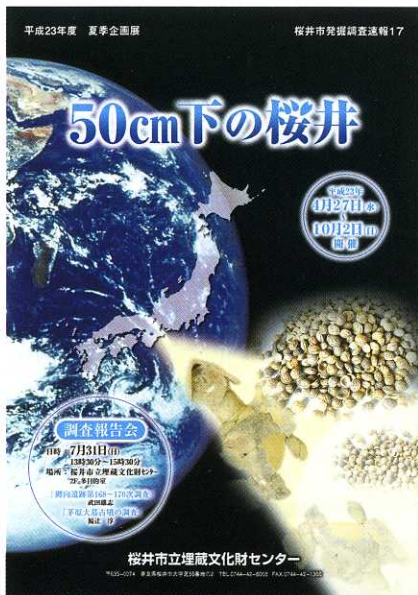
ご縁あって桜井市に來ましてから早いもので 10 年が経ちました。これまでに纏向遺跡をはじめとする遺跡や、古墳などの調査を担当させていただきましたが、ここ数年は、纏向遺跡で行われた調査でまだ報告書が刊行されていないものをまとめていく作業や、纏向 162・166・168・170 次調査で出土した遺物の整理をしています。報告書づくりは、現場で記録された写真や図面をたよりに調査でわかった事柄を本にまとめる作業ですので、自分で掘っていない遺跡の報告書の作成は難しいところもありますが、じっくり資料に向き合っていくとその現場に立っているような感覚になったりして楽しいです。普段は纏向遺跡の調査事務所で作業をしていますので、今後ともよろしくお願いたします。

苅谷史穂 (かりや しほ)

「史(ふみ)重(し)ぎて 真(ま)神(がみ)の苅(かり)穂(ほ)玉(たま)と為(な)し 谷(や)霧(ぎり)別(わ)かちて 神(かみ)拝(おろ)がめり」— 歴史を積み重ねてきたように私(史穂)は苅穂を黄金の玉として敷きつめた。天を仰げば谷にかかる霧を分けて神が現れたので祈りを奉げた。— これは、私が生まれる前に父が作った歌で、纏向遺跡一帯の葦原から三輪山の方を見た光景に私の名前を一字ずつ入れて詠んだものです。

幼少の頃から、父に連れられ山辺の道や各地の遺跡と発掘調査現場を巡った私は、学生時代に調査を始めて 15 年が経ち、九州・東海・関東の様々な遺跡の調査をして桜井市に辿り着きました。桜井の文化財は本当に素晴らしいものばかりで、盆地が見渡せる五ヶ谷や初瀬の谷から菅墓古墳がぐっと迫ってくる景観には神々しいものを感じます。10 月からは神奈川県内で文化財の仕事することになりましたが、いつか桜井市が、1800 年前の纏向のように人々が集い活気が漲るような街になっていくように心より応援しています。





埋蔵文化財センター展示収蔵室からのお知らせ

埋蔵文化財センター展示収蔵室では4月27日から10月2日までの会期で平成23年度企画展示『50cm下の桜井 - 桜井市発掘調査速報展17-』を開催しています。

今回の企画展示は桜井市教育委員会と財団法人桜井市文化財協会が昨年度に実施した発掘調査と、緊急雇用創出事業による遺物の復元やレプリカ作成の成果を一堂に展示するもので、纏向遺跡や茅原大墓古墳をはじめとする11件の発掘調査からの出土資料と復元された小立古墳や纏向遺跡出土の埴輪が展示されています。

今回初めて公開される遺物が多数展示されていますので、出土したて、復元したての資料をぜひ一度ご観覧ください。

開館時間 9:00 ~ 16:30 休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日と9月21日
(祝日は開館いたします)
入館料 / 大人 200円 小・中学生 / 100円 市内の小・中学生は入館無料
(20名以上の団体は大人 150円 小・中学生 50円)

※なお、10月5日から12月4日の会期で特別展示『ヤマトの王と居館』が開催されます。こちらもご期待ください。

書籍が刊行されました！！

桜井市立埋蔵文化財センターと田原本町唐古・鍵考古学ミュージアムの共同編集書籍『ヤマト王権はいかにして始まったか』が学生社より刊行されました。

この書籍は平成19年10月に田原本町教育委員会と桜井市教育委員会、(財)桜井市文化財協会の共催でおこなわれた同名の講演会とシンポジウムをもとに加筆・編集されたもので、それぞれに大和を代表する遺跡でありながら営まれた時代や所在する行政区域の違いから総合的な検討があまり進んでいなかった唐古・鍵遺跡と纏向遺跡について、統一したテーマに沿って多角的に検討がおこなわれています。

内容は寺沢薫先生のコーディネイトのもと、桜井、田原本の各調査担当者による遺跡の基調報告のほか、石野博信先生をはじめとして、秋山浩三氏、森下章司氏、松木武彦氏と研究の第一線で活躍されている諸先生方をお迎えし、環濠集落、交流、青銅器、古墳、吉備と大和との関係についてと様々なテーマにもとづいた報告とシンポジウムの内容がおさめられています。

本書はヤマト王権と唐古・鍵、纏向両遺跡の関係や研究の到達点や課題を知って頂くには最適の書です。興味のある方は是非ご一読ください。



刊行物のご案内

埋蔵文化財センターでは纏向遺跡をもっと知りたい方のために以下の図書を頒布しています。

ガイドマップ『改訂第4版 纏向遺跡へいこう!』200円(2011年2月に新版を刊行しました。)

『纏向石塚古墳第1期整備事業 範囲確認調査(第5次~第7次)概要報告書』900円

『ヤマト王権はいかにして始まったか』学生社 2,460円

『大和・纏向遺跡』第3版 学生社 10,500円(2011年5月に新版が発売されました。)

※ご購入方法は 桜井市立埋蔵文化財センター内 (財)桜井市文化財協会までお問い合わせください。

編集後記

第3号をお届けいたします。本来は昨年末に刊行の予定をしておりましたが、諸般(予算)の事情により刊行が少し遅れてしまいました。今回はニュースが多く、泣く泣く割愛した記事もありましたが、次号には掲載したいと思っております。次号は冬に予定されている学術調査の成果を盛り込んで刊行の予定です。今年の調査はどのような成果があがるのか?乞う御期待!! (teru)

纏向考古学通信 Vol.3

発行 平成23年9月1日

編集 桜井市立埋蔵文化財センター

〒633-0074 奈良県桜井市芝 58-2

TEL 0744 - 42 - 6005

FAX 0744 - 42 - 1366

纏向考古学通信は「卑弥呼の里・桜井ふるさと応援寄附金」を活用して作成しています。

